■国際シンポジウム
「Comparative Studies among the Formative Period Cultures in the Andes」
（アンデス形成期文化の比較研究）

松本雄一（山形大学）

2014 年 11 月 29 日（日）、国立民族学博物館　第 6 セミナー室において、「Comparative Studies among the Formative Period Cultures in the Andes」（アンデス形成期文化の比較研究）が開催された。本シンポジウムの主催は、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）、協力は古代アメリカ学会であった。

ペルー中央高地に位置するチャビン・デ・ワンタルは、アンデス文明の形成過程において鍵となる遺跡として半世紀以上にも渡って議論の対象となっている。この遺跡において、1994 年以来長期にわたる調査を実施しているのが、米国スタンフォード大学のジョン・リック准教授率いるチャビン・プロジェクトであり、年代測定や測量において最新の技術を用いたその調査は国際的な注目を集めている。今回のシンポジウムにおいては、同プロジェクトにおいて動植物の分析を行っている研究者が中心となって参加し、近年同時代の遺跡を発掘している日本人研究者が持つデータとの比較が試みられた。重要な遺跡の最新の分析結果を聞くことができる貴重な機会であり、使用言語が英語とスペイン語であったにもかかわらず参加者は 21 名と盛況であった。

発表者は、発表順に瀧上舞（山形大学）と米田穣（東京大学）、マシュー・サイヤー（南ダコタ大学）、鵜澤和宏（東亜大学）、シルバナ・ローゼンフェルド（南ダコタ大学）、長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）、ジョン・リックとロサ・メンドーサ（スタンフォード大学）であり、関雄二（国立民族学博物館）が総合司会を、鶴見英成（東京大学）と松本雄一（山形大学）がコメンテーターを担当した。

最初に瀧上舞と米田穣が、パコパンパ遺跡出土資料を用いた同位体分析の成果を提示し、形成期社会における食性変化とその社会的差異の萌芽との関わりを論じた。次に、マシュー・サイヤーが、チャビン・デ・ワンタルの神殿の外側に位置する、ラ・バンダ地区から出土した大型植物遺存体とプラント・オパール分析の成果を示し、そのデータが神殿外での儀礼と日常生活を明らかにする可能性を論じた。鵜澤和宏は、パコパンパとクントゥル・ワシの動物骨の分析成果に基づいて、アンデス北高地におけるラクダ科動物の飼育化の要因を論じた。シルバナ・ローゼンフェルドは、チャビン・デ・ワンタルのラ・バンダ区出土の動物骨・骨角器の分析から、過去の研究の問題点を指摘し、同地区が工房であった可能性を論じた。続く長岡は、パコパンパ遺跡から出土した人骨の形質学的な分析の方法をその結果の発表を行った。最後の発表であるジョン・リックとロサ・メンドーサは、2014 年度の最新成果のレポートを行い、神殿の北の方に位置する建築 C の使用と埋め立ての過程を報告した。それぞれの発表後には、質疑応答の時間が設けられ、方法論から解釈、時期同定に至るまでの幅広いテーマで活発な討論が繰り広げられた。

以下は、各発表の概要である。

・瀧上舞、米田穣
「形成期後期の食性変化」

本発表では、パコパンパ遺跡出土資料から 45 点の人骨資料、60 点の動物骨資料を抽出して行った、炭素窒素同位体解析の成果を提示する。アンデスにおけるトウモロコシの導入は公共祭祀建築の出現と同時かそれよりも早い時期から開始しており、トウモロコシの生業経済的や儀礼における重要性がどのようなものであったかは常に議論となっていた。トウモロコシは前期中間期に至るまで主食とはならなかったというのが近年の論調であったが、カハマルカのデータはトウモロコシの重要性が形成期後期に高まったことを示している。本発表で提示したパコパンパの解析結果は、形成期後期に対応する PC-II 期に C4 植物（トウモロコシ）の消費量が増加したことを示している。一方で同時期に金製品とともに葬られたエリート層における C4 植物の消費量が低いことも判明した。このような C4 植物の消費に関

するデータは主食としての消費、C4 植物を食べた動物の消費、トウモロコシの酒であるチチャの消費等の複合的な要因が考えられるが、何らかの形で社会的差異の出現と関わっていた可能性がある。

・マシュー・サイヤー
「焼かれたヤシと栽培されたトウモロコシ：チャビン・デ・ワンタル出土の大型植物遺存体とプラント・オパール分析」
　本発表では、チャビン・デ・ワンタルの神殿からモスナ川を挟んで対岸に位置する居住域、ラ・バンダ区における植物利用の実態を論じたものである。その際に、ミト様式の祭祀建築が発見された同遺跡のウエスト・フィールド区のデータとの比較を行った。ウエスト・フィールド区から出土した植物遺存体は、同区におけるメインの活動が儀礼行為であったことを示唆しており、儀礼に使われた可能性のある燃やされたヤシの木が数多く出土している。一方で、ラ・バンダ区からは他に比べて数多くの木材が出土している。また、ラ・バンダ区ではトウモロコシの軸の出土がないのに対し、ウエスト・フィールド区ではトウモロコシの軸が出土しており、二つの地区ではトウモロコシが異なる形で搬入されていた。全体として、ラ・バンダ区のデータが、居住、工房などの様々な活動の痕跡を示唆するのに対して、ウエスト・フィールド区のデータは儀礼などの特定の活動が行われていたことを示している。このような結果は、初期農耕社会における儀礼行為と日常的実践に関する議論に貢献することができるであろう。

・鵜澤和宏
「狩猟から牧畜へ：形成期における生業変化を理解する」
　本発表は、パコパンパ遺跡とクントゥル・ワシ遺跡から出土した動物骨の分析成果からペルー北高地におけるラクダ科動物の拡散過程を論じ、形成期における生業の変化を考察することを意図したものである。近年の調査によって、パコパンパとクントゥル・ワシにおいては家畜化されたラクダ科動物は形成期後期に最初に現れ、次の時期で重要な種として確立することが明らかとなった。さらに、死亡年齢とストロンチウム同位体の分析結果からは、ペルー北高地では形成期後期に牧畜の重要性が増すと同時に狩猟の重要性が低下していることが示唆されている。このような変化には多様な要因が考えられ、別の場所で放牧されていたラクダ科動物が連れてこられるなどの実験的なプロセスが想定される。環境変化や遠隔地交易の活発化などの変化と対応して、家畜化されたラクダ科動物は形成期後期における生業体系の変化のきっかけとなったと考えられる。

・シルバナ・ローゼンフェルド
「骨のついた肉と骨からはがされた肉：チャビン・デ・ワンタルにおける干し肉と骨角器」
　本発表は、チャビン・デ・ワンタルのラ・バンダ地区から出土した動物骨の分析結果を提示し、これまで影響力を有していた「干し肉効果（チャルキ・エフェクト）モデル」を新たな資料から再検討し、合わせてラ・バンダ地区が骨角器製作の工房であった可能性を提示する。
　ジョージ・ミラーとリチャード・バーガーが 1995 年に出版した論文では、チャビン・デ・ワンタル出土動物骨の部位が大きく偏っていることから、干し肉とされて高地から特定の部位が運ばれてきたというモデルが提示された。しかし、近年のラ・バンダ区のデータからは同様の傾向は読み取れず、ラクダ科動物は特定部位だけではなく全体が利用されていたと考えられる。同区は、骨角器の未製品が数多く発見されたことからある種の工房としての性格を有していたと考えられるが、その骨角器にも様々な部位の骨が使用されており、干し肉効果モデルを適用することは難しい。このようなデータの違いがなぜ生じたのかを、今後遺跡全体の空間利用の観点から考察することが必要である。

・長岡朋人
「ペルー北高地、パコパンパ遺跡出土人骨の生物考古学」
　本発表は、ペルー北高地に位置するパコパンパ遺跡より出土した人骨の生物考古学的分析の成果を提

示するものである。64 点の頭骨に関する分析を行ったが、その内訳は 22 の未成年と 42 の成年であった。22 の未成年の頭骨のうち、1 才以下が 19 を占めており乳幼児の死亡率が高かったことが示された。平均身長は男性が 162.3 ㎝、女性が 147.3 ㎝であった。男性から 1 点、女性から 2 点の頭蓋変形が確認された。他の新たな発見としては、4 点に治癒した骨折の痕跡が確認された点が挙げられる。

・ジョン・リック、ロサ・メンドーサ
「チャビン・デ・ワンタル調査 2014 年：チャビン期の儀礼建築と儀礼行為への含意」
本発表はスタンフォード大学チャビン・デ・ワンタル調査プロジェクト、2014 年シーズンの成果を示し、儀礼建築とその使用に関する考察を加えたものである。2014 年度の発掘調査は旧神殿といわれる建築の北に位置するビルディング C とその周囲において発掘調査を行った。
ビルディング C とその南のビルディング D の間に位置する通路からは、意図的に破壊・廃棄された土器をはじめとする儀礼の痕跡が数多く確認された。通路は改変によって縮小され、内部には水路が設けられた。このような儀礼行為と建築の改変は、ブラックアンドホワイトポータルフェイズ（紀元前 900～500 年）に明確に対応しており、出土するハナバロイデ様式の土器もこの点を裏付けている。
また、近年発見された新たなエスプラナデ回廊の 75%に及ぶ範囲を発掘し、同回廊がチャビン期に埋められていたことを明らかにした。回廊は清掃されており、少量の奉納物と床が複数回張り替えられている様子が確認された。さらにビルディング C の地表側の面からは、広場と水路を備えた後期チャビン期の建築が発見され、通路と回廊と共に機能したと考えられる。
全体として、2014 年の発掘は建築の儀礼的な性格を確認したといえる。特に、ビルディング C とその周囲を合わせた一連の建築は、高度に構造化され差異化された多様な儀礼活動が行われたことを示しており、チャビン・デ・ワンタルの宗教体系の多面性を示している。

主催：国立民族学博物館
科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」
（代表：関雄二）
協力：古代アメリカ学会